



ウェーバーと比較社会学-「人格化」と「物象化」 の東西文化比較-

著者	佐久間 孝正
号	39
発行年	1988
URL	http://hdl.handle.net/10097/14906

さくま こう せい
佐久間 孝 正

学位の種類 教育学博士
学位記番号 教 第 39 号
学位授与年月日 昭和63年7月13日
学位授与の要件 学位規則第5条第2項該当

学位論文題目 ウェーバーと比較社会学
——「人格化」と「物象化」の東西文化比較——

論文審査委員 (主査)
教授 田原音和 教授 塚本哲人
助教授 不破和彦

論文内容の要旨

1. 著者は研究生生活の当初から、社会科学の方法論および認識論におけるウェーバーとマルクスの理論的關係を原理的に確認することに専心してきた。本論文は、そのウェーバー社会学の主要課題が「物象化論」にあったことをつきとめ、これを論証し、それによってマルクスの「物象化論」との対比を試みたものである。そのため著者は、『経済と社会』や『宗教社会学論集』などのウェーバーの主要著作を丹念に渉猟し、(1)彼の社会学の根底にはヨーロッパ対アジアという比較の視点、とりわけ東西文化の比較的視点がとりこまれていること、(2)それゆえに彼の物象化概念は、対概念としての人格化概念との対比という特色をもつにいたっており、さらに経済を越えて多様な文化的構成要素との関連において考察された豊かな内包をもっていること、(3)しかし、物象化を経済のみならず文化の各領域における、いわば普遍的概念とみることによって、とくに「近代」における物象化の特色をマルクスと異なったものとして把握するに至ったこと、を明らかにした。それによって、ウェーバーの「物象化論」がマルクスのそれよりも広い意味内容をもっていることを確認し、両者の対比を契機として、教育という文化現象の東西比較のための基礎理論構築の展望を獲得しようとしたものである。なお、本論文は同じ題名を書名として1986年10月に創風社から公刊されている。

2. 本論文の構成は次の通りである。

第一部 ウェーバーとクルクス主義

第一章 ウェーバーとカウツキ——ロシア革命論とダーウィニズムの歴史観をめぐって——

第二章 ウェーバーとレーニン——組織論・政党論・議会論をめぐって——

第三章 マルクス、エンゲルスとダーウィン——ダーウィン『書翰』をめぐる問題——

第二部 ウェーバーと物象化論

第一章 『法社会学』と物象化論

第二章 『支配の社会学』と物象化論

第三章 『都市の類型学』と物象化論

第四章 『宗教社会学』と物象化論

第三部 ウェーバー比較文化論と「近代」の超克

第一章 比較文化のための方法論

第二章 東西文化圏の合理と非合理

第三章 政治による近代の超克

第四章 大統領制論の宗教社会学的神秘性

3. 本論文の内容

以上の構成からも知られるように、本論文は三部から成る。第一部は著者も指摘している通り、著者の旧著『ウェーバーとマルクス』（世界書院、1984年刊）の続編としての性格をもつもので、ここでは社会主義論の一点に絞ってウェーバーとマルクスの理論的特徴を対比することが試みられている。ただし、主として、ウェーバーの立論の特徴を重視する見地から、主要にはウェーバーと時代を共有する二人のマルクス主義者、カウツキーとレーニンの理論との対比に力点がおかれ、この両者の理論的対立点を通してマルクスの社会主義論が浮き彫りにされている。

まず第一章ではカウツキーによるロシア革命の批判が詳細に述べられているが、これにレーニンの反批判を対置して、ロシア革命の歴史的特殊性の評価をめぐる両者の理論的争点が明示され、その分岐点がパリ・コミューンの評価に帰着すること、カウツキーの批判の根底には進化主義的歴史観が伏在すること、両者とマルクスの理論的相違点などが明らかにされ、結局、カウツキーの提起した問題が高度に発達した産業国家の変革の困難性にかかわる点で、現代社会主義論と問題性を共有していることが確認される。そして、この点にかかわって、ロシア革命を批判的に検討したウェーバーの論点とカウツキーのそれとが、立場の相違にもかかわらず共通する点を、(1)社会主義体制における官僚制発達の不可避性、(2)中央集権的国家管理（いわゆるプロレタリアートの独裁）による議会制民主主義の抑圧、(3)社会主義における帝国主義の残存、に求めている。

ロシア革命による社会主義の実現をめぐってのウェーバーとカウツキーの問題性の共有は、し

たがってカウツキーと対峙したレーニンとウェーバーの争点を明らかにする方向に導かれる。第二章はこの点を取りあげたものであるが、まずレーニンの社会主義変革理論の諸特徴が明示され、ついで(1)ソビエトの建設と前衛党の確立による直接民主制の確立へと向かうレーニンの理論的根拠、(2)党による代表制と官僚制に対するレーニンの理論を詳述した上で、これらの問題に対するウェーバーの理論が克明に対比されて、特殊な革命としてのソビエト体制が特徴づけられ、最後にウェーバーとレーニンの理論的対比を批判的に試みることで締めくくられる。その焦点は(1)国家の規定の仕方、(2)民主主義のとらえ方、(3)「専門化」をめぐる組織の分析方法の三点における両者の理論的対立である。著者はここで両者の理論を批判的に検討しながら、主要にはウェーバーの官僚制論を基軸とする国家論が現代社会主義に対する批判的視点としてなお原理的に通用する諸点を浮き彫りにしている。

なお、第三章はダーウィンからマルクスに宛てた書翰の真偽をめぐる考証の問題であり、ダーウィニズムとそれに対するマルクスおよびエンゲルスその他の対応の中にみられる史的唯物論との対比を、最新の研究成果にもとづいて検証したものである。いわばダーウィニズムをめぐる当時の西欧社会科学についての知識社会学的考察であり、当時の諸学の知的配置状況に対する著者の目くばりを通して、その力量の一端を知ることができる。

以上の第一部の論述は、本論文のいわば序論的性格をもつものであるが、それは単にウェーバーが生きていた時代状況に対する彼の時論的評価を問題とするのではなく、社会主義体制の登場とその理論的根拠を問い直すことを契機とするウェーバー社会学の可能性と限界を批判的に考察したものである。したがって、とくに社会主義論をめぐるマルクスの理論と対比された限りでのウェーバー社会学の特性を踏まえた上で、本論文の主題をとり扱ったウェーバーの物象化論が展開されることになる。それが第二部である。ここでは、ウェーバーの名著『経済と社会』および『宗教社会学論集』に依拠しつつ、東西文化の比較を通して近代の合理化としての物象化の解明がどのように行われたのかが論証される。

著者はまず『経済と社会』に含まれている『法社会学』において、ウェーバーが古今東西の法の形成とその展開がそれぞれの社会の文化構成によって相違する点を解明したものとしてとらえ、法が一般的に近代に近づくほど人格的なものから物象的なものに置き換えられるということと、この物象化をめざす合理化のされ方いかんが各民族の固有の文化類型を端的に表出するということの二点に注目する。そこで第一に、法の端緒形態である「習俗」から近代法への移行過程に関するウェーバーの複雑な分析から、習俗のように特定の人格や身分のいかに左右されない法そのものの物象化がもたらされざるをえないこと、法そのものの形式合理化にともなって法の担い手の官僚制化と国家の強制装置化などが進展せざるをえないこと、さらに法そのものが固有の法則制にもとづいて自己転回することが可能になることなどを引き出し、要するにウェーバーによる法の近代化・合理化とは、まさに法の物象化・非人格化であると結論する（第一節）。

ついで、ヨーロッパにおける法の物象化が教権と俗権と市民層の三つの権力関係の交錯を通し

て解明され、中世ヨーロッパ文化のダイナミズムと不統一性が法の物象化をますます推し進め、ついに宗教倫理と経済倫理の越えがたい溝を埋める禁欲的プロテスタンティズムがそれに適合的であったことに及ぶ。他方、アジアでは主としてインドと中国の法形成を例にとりながら、インドのカースト規制にもとづく独自の宗教倫理、中国の民族的な家産制国家・経済構造と儒教的倫理が、ついに近代法の形式合理性を実現しえなかったところにヨーロッパとの差異を見いだすウェーバーの論証から、法の物象化における東西文化比較の方法論的視点の有効さが検証される(第二節)。そして、ウェーバー物象化論の特徴として、次の諸点が確認される。(1)法の物象化が形式化・合理化というような抽象的一般化の含意をもつこと。(2)この法の物象化はローマの教権制や中世西欧の教会法にも、さらには近代法にも確認できるという超歴史的品格をもつ(したがって社会主義法にも及ぶ)。(3)習俗を律法たらしめるカリスマの超人的資質が制度化され官職化されることによって生ずる物神崇拜化(カリスマの物象化)を含む。(4)カリスマや法の物象化という表現にみられるように、物象化を経済領域にとどまらぬ広範な文化領域にまで及ぶものとして、いる。(5)物象化が人種も国民も問わぬ社会関係の普遍性と関連づけられている。(6)こうして、物象化とは価値判断から自由なものとして考察されている。およそ以上の諸点にウェーバー物象化論の特徴を総括している。

第二章は同じくウェーバーの『支配の社会学』の中に物象化論を検証しようという試みである。周知のように、ウェーバーは支配の類型をカリスマ的支配・伝統的支配・合法的支配の三つに分けているが、著者はウェーバーがこの類型化によって、古代の呪術的・魔術的な性格の強いカリスマ的支配から形式合理的な法による近代的支配を見通す発展段階的な見方を主張するところに主要なねらいがあったのではないとみる。むしろ、近代の合法的支配関係とはまったく異質なカリスマ的支配原理を明らかにすることによって、近代社会がいかに人格的關係を排除した物的な関係に蔽われているかを明らかにするためであったとみる。したがって支配の類型化はそのための説明原理であり、支配における物象化はこのカリスマ的支配との対比においてつかみとられたものだとして理解する。

このような視点から、ウェーバーに依拠しつつカリスマ的支配の特徴を明らかにするが、とりわけ著者は、この支配の特定の英雄的・予言者の人物の存在と被支配者たちの自由な帰依による支配の正当性の承認という事実、したがって人と人との直接的・人格的關係に注目して、それを基軸としつつ、特定の人格から剥離されたカリスマの次代への継承と日常化を通してカリスマが物象化される過程分析こそウェーバー理論の特徴だとみる(第一節)。ついで伝統的支配については、家父長制的支配と家産制的支配の二典型におけるウェーバーの物象化論の論拠を解明し(第二節)、カリスマ的支配と対極的な地点で成り立つ「没主観的」にして「非人格的な秩序」としての合法的支配が、カリスマ的資質の持ち主に対する人格的帰依でもなければ、伝統的な権力保持者に対する人格的服従でもなく、およそ形式的規則に服せざるをえないことを了解した人びとの法に対する服従によって成立する支配関係であるところに、近代的・合法的支配の物象化のウ

ウェーバー的理論を明らかにする（第三節）。ここでもまた、ウェーバーの分析が東西文化の比較の上で成り立っていると指摘することを、著者は忘れていない。

『都市の類型学』をとりあげた第三章でも、ウェーバー社会学を物象化論と文化比較の見地から読むことで貫かれている。そこではまず都市の理念型による概念規定の検討が行われ、ウェーバーがこの類型によって西洋と東洋の都市の比較を行い、なぜ西洋の都市のみがこの類型規定にもとづく独自の都市的性格を獲得することが可能になったのかを物象化の過程としてとらえ直し（第一節）、ついで西欧都市の合理化・物象化が、その中世において、いかにして「非正当的支配」（市民による権力奪取）の性格を帯びるようになり、都市が民主化されることによって文化全般の官僚制化が進行し、それがかえって都市民主主義の空洞化を惹起して近代国家の合法的支配に移行するか、その解明にウェーバーの独自性をみる（第二節）。

第四章は、ウェーバーの『宗教社会学論集』のうち、とくに「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」を中心に、近代の非人格的な経済原理を生み出す上でカルヴィニズムの宗教倫理が果たした役割のなかに、『経済と社会』の諸論文にみられた物象化論と同じ方向を見出そうとする。その論証は、第一にカルヴィニズムの「予定説」が絶対的な神に対する卑小な人間という構図のもとに、社会関係を徹底的に非人格化・物象化するという帰結に導くウェーバー的方法的独自性が検討される（第一節）。第二に、この宗教倫理が資本主義的経済倫理といかに適合的であったかという有名なウェーバーの理論が検討され、彼の「合理化」概念が「人格化」概念と対極的な意味が含まれていること、総じてウェーバー宗教社会学がこのような見方からする物象化の理論にはかならないことが主張される（第二節）。ここで著者が、宗教倫理の合理化過程に関するウェーバーの理論のなかの「カリスマ的教育」と「合理的教育」の対比を重視し、近代教育もまたこの広範な物象化過程の一翼を形成するものとみていることに注目しておきたい。

以上のように、広範な対象領域にまたがるウェーバー社会学の物象化論を論証し、分析した上で、第三部ではその比較文化論の性格を問うことと、物象化に集約される「近代」の超克をウェーバーがどのように展望していたかが問われる。第一にウェーバーの東西社会・文化比較の方法論について、著者は彼が採用した比較の要素を(1)地理的・風土的問題、(2)社会的・経済的組織、(3)政治的なかんとく軍事的問題、(4)宗教的・文化的問題に集約し、ウェーバーはこれら要素の相互関連や因果帰属に細かい注意を払ったが、とりわけ(4)の要素に注目したこと、および周知の理解社会学の方法を駆使したことが、彼の文化比較論をきわめて独自かつスケールの大きなものとしたことに注目する（第一章）。次に、彼がなぜ執拗なまでに東西文化の比較を追い求めたかについては、これまでの各文化圏の諸矛盾を乗り越える新たな文化圏の形成を模索するところにあったとみる。アジア社会の非合理性の対極ともいうべきヨーロッパ社会の合理性に「近代」の展開基軸を求めるとしても、それはまさしく官僚制の徹底をはじめとする物象化の先端に立っており、経済を基調とするその基本傾向の阻止は社会主義においても不可能だとみた上で、それでもなお挑戦の手段が残されているとすれば、それは「政治」であるというのがウェーバーの結論だと解

積する（第二章）。

したがって、この政治による「近代」の超克においてウェーバーが具体的に何を考えていたのかについて、著者はウェーバー晩年の時評的論文をこれまでの彼の社会学理論と照合しつつ、中央集権化よりも議会制に支えられた連邦制を、さらには人民投票による大統領制を展望したことに注目する。前者は市民層の活動を媒介とした国民国家、国民経済の確立に適合的であり、後者は物象化され合理化された社会関係の只中でカリスマ的な人格的支配を確立することによって、東洋において社会の停滞性をもたらし、西洋においては物象化された人格性を、改めて政治的に再現するのがウェーバーの理論的帰結である。ここまでくれば、ウェーバーの執拗なまでの東西文化比較が、単に比較のための比較にとどまらず、このような新しい市民社会の構想があったからだと著者はみる（第三章）。

しかしながら、ウェーバーが人民投票の指導者民主制に期待するにいたるまで、なぜとりわけカリスマ的人格性の新しい再現に固執するのか。その理由を尋ねて彼の特異な人格化概念を再検討し、究極的には(1)人格的關係が支配関係（縦の関係）のみにおいて内実が与えられていること、(2)人格化の対極における非人格化が、本来の偉大な資質が特定の人格から引き離されるという意味での没主観化を含意していることの二点をとりあげる。そして、マルクスの物象化論と入念に対比しつつ、そこにウェーバー物象化論の特異さと豊かさとともに、その限界をみるのである（第四章）。しかし、政治論の中にもなお投影されるウェーバーの支配社会学から宗教社会学にいたる全業績の重みを再認識しながら、こうした限界を越えてウェーバーとマルクスを新たな次元で再構成することが、次の課題として展望されている。

論文審査結果の要旨

周知のように、ウェーバーはなぜ近代資本主義が西欧にのみ固有に成立しえたかという課題を終生持ちつづけた点で、これを別の形で問いつづけたマルクスと対比されることが多い。しかも、両者はともにあい容れぬ対立的な二つの理論形態として対置されることが多かった。本来、マルクスの資本主義分析の基礎視角とされる「物象化論」をウェーバーに適用するということは、それだけで後者を前者で斬るという意味を帯やすい。近年、ようやくウェーバー社会学の主題もまた「物象化論」にあったことが指摘されはじめているが、しかし、ウェーバーの主要な著作から時評的論文にいたるまで、その広範な業績を物象化の視点から再評価するという徹底した作業は、おそらく本論文をもってその嚆矢とするであろう。しかも著者が、とりわけウェーバー社会学にヨーロッパ対アジアという比較の視点、なかならず経済のみにとどまらず宗教や文化などの各領域を含めた文化比較の視点が貫かれていることを重視しつつこの作業を遂行したことは、それだけでわが国の社会科学に対する一貢献であるといつてよいであろう。

ウェーバーの物象化論を著者が包括的に問題にしたということは、単にマルクスの物象化論と対比してこれを判断しよるところにあるのではなく、物象化論として両者を等置した場合、それぞれの理論の独自性がどこにあるのかを探究したということである。もちろん、人間観から史観までを含む認識論的前提を踏まえてマルクスの物象化論から出発する以上、それを比較の基準とするのならマルクス側からするウェーバー批判があることは当然だといえる。しかし、その反面でマルクスのそれには欠落しているもの、見えなかったものがあることも確かである。著者が「ウェーバーの人格化・物象化概念には、マルクスよりはるかに広い意味・内容がこめられている」というのも、マルクス理論について新しい視点から批判を加えているのも、そのことを指しているのであろう。

著者がウェーバーに対して最も批判的な点は、ほかならぬウェーバーの物象化論を可能にさせたあの合理化という普遍概念であろう。この概念には、古代以来の主知化一般として科学化一般・計算可能化一般などの普遍的な意味がこめられているが、それゆえに近代資本主義の矛盾に特殊な形態規定をそこからひき出すことが困難だからである。たとえていえば、マルクスの生産力という普遍概念に対応する生産関係という対概念が、各時代の特殊な形態規定とかかわって個別的な社会構成をおさえることを可能にする、というような概念装置が欠けている、と。その意味では、ウェーバー社会学とは、有史以来現在にいたるまでの社会関係の合理化と物象化に関する社会学であるとみる著者の見方は当たっている。

しかし、著者も気づいているように、この合理化は、その時代、その社会の多様な歴史的現象を、多様な文化構成要素その他との因果帰属によって、まさに物象化として理解することを可能にした。たとえば官僚制を例にとれば、西欧中世の教会や中国の家産官僚制、あるいは近代官僚制がそれである。さらに、ウェーバーの合理性概念はそれ自体として価値から自由だから、最も合理的な社会は自然的な人間的存在の対極にあるものとして、まさにそれゆえに非合理的なものとして、二重の刻印を帯びることになる。しかも、ウェーバーの分析する物象化は、マルクスのそれと触れ合うことも稀ではない。いわんや文化・宗教・教育といった文化構成の東西比較や体制確立以降の社会主義などに関する分析の成果は、かえってウェーバー独自の物象化概念によってこそ明確にされたところが少なくない。著者の綿密な分析によって、ウェーバーの概念内包の多様さや支配・服従関係の一面的強調などにみられる特異な人格化概念もまた、彼独自の物象化論に負うことについても明らかにされた。いいかえれば、合理化・物象化に関するウェーバーの方法論が、そのもつ特殊性によってこそ豊かな分析結果をもたらしたことを、著者は十分に汲みとっていたということが出来る。

なお、物象化にかかわってウェーバーが教育に直接触れることは稀であるが、彼の「合理化」という意味の独自さに注目して、著者は彼の「カリスマ的教育」と「合理的教育」との対比を試みている。前者はだれにでも施されるものではなく、まさしく素質のある者のみが選抜され、隔離され、特殊な教育によってその才能が目覚められるものであり、後者は個々人の素質や個性とはさしあ

って関係なく、一定の知識の修得が目指される場合である。近代の学校教育が民主化され、それが大衆のものになればなるほど、組織的・合理的な技術にまで合理化・物象化されること、それがなぜかなくなって他ではなかったのかということのウェーバー的発想をめぐって、著者はイリイチにも関説している。すでに著者には『イギリスの文化と生涯教育』（人間の科学社、1983年刊）という著作があり、滞英中ケンブリッジの夜間学校について実施した調査報告をもとに、イギリスの成人教育に関する研究を公刊している。ウェーバーに直接かかわらないが、東西文化比較についてのウェーバーからの示唆をそこに見ることができるであろう。

社会科学の巨人ウェーバーを新たな視点から見直すことそれ自体が難事であるばかりではなく、内外のウェーバー研究も龐大な量に達するが、著者は最新の研究成果にもよく精通している。本論文を含む一連の著書・論文によって、著者は年来の研究課題である教育・文化現象の東西比較研究に資する基礎を理論的によりよく固めえたものと信ずる。

よって、教育学博士の学位を授与することを適当と認める。